

表1— 都道府県，指定市青少年対策主管課

<42.3.9>

	知事部局 総務 企画	民生 厚生	教育委 員会	計
青少年専管課	15<1>	6<1>	4<4>	25<6>
非専管課	5	22	0	27
計	20<1>	28<1>	4<4>	52<6>

< >は指定市

私はこの際、青少年行政の機構上の体制も再編成して、企画立案部局も実施部局も統一した形で実施できるようにしたらよいと考える。もちろん区の体制もそれにもとづいて編成しなおさなければならぬ。

<民生局青少年課長>

《コメント》

青少年行政に望む

高橋四郎

昨41年の8月、わたくしの携わっている青少年問題協議会や社会教育委員会に、平生はなんのかわりもないと思われる一実力者が、突然「ハンドボールは青少年の健全育成に非常に役立つものだから、ぜひハンドボール大会を開催しよう」と提案した。そしてその企画があまりに唐突だからといって渋っていた青少年関係各課員や区市民課長などを叱咤して、ついに全市青少年ハンドボール大会なるものを三ツ沢で開催、数百名を集めて盛んな大会にしたことを覚えている。わたくしは、年初詳細な予算計画をたてて一つ一つ慎重に行なわれる行政のなかで、こんな横紙破りのことが行なわれていいものだろうかと思案をもたざるをえなかった。

しかし、後になって、もしこうした強引なやり方が、横浜市の青少年問題の最も緊急大切な問題に向けられ、早急に対策をたて、実行されていくことがあるとしたら、こんなすばらしいことはないと思うようになった。しかし、自分が市の行政を少しずつでも知っていくと、ただ青少年に関することだけでもなかなかそうは簡単にいかず、複雑であることがわかり、声を大きくしてそれをいうだけの勇気を失いがちである。

青少年行政をみていくと全く“のれん行政”といわざるをえない。しかもそれは一本ずつたれさがった縄のれんである。各縄はしっかりと上層に連らなっており、そこから流れてくる指令に基づいて忠実にそのフィールドで仕事をしている。そして市民から全体をみればすべてそろって美しい模様が描き出されていると思う。しかしなにか真剣に考えてぶつかっていくと、どこも受けとめてく

れるところがないのである。また、一本一本はしっかりしていながら横の連携がほとんどないように思われる。

行政内において、しばしば話し合いがなされ、協議が重ねられていることは知っているが、それが、いざ実行となるとお互が自分の限界を定めて消極的になり、地域が各関係団体に対してはばらばらのこととなってしまいがちである。同じ対象に対し、ある時は社会教育関係から、ある時は青少年部関係から、いろいろ重複しながら指令がくるので困っている。青少年団体に対する助成金のことでも、ボーイスカウト、ガールスカウト、健民少年団その他既成の青少年団体にはほとんど社会教育から出されており、その他の地域青少年グループには青少年課から出されているようだ。こういうところから実は全体が一致してなにかしようとするものの困難が起ってくるのである。青少年に対する行政はなんとか窓口を一つにしてもらえないものかというのが市民の願いであり、ことに青少年の問題に直接携っている者たちの願いである。

つぎに、わたくしは行政というのは、一つのオーダーでもあると考えるのである。一つの企業が最もよく能率をあげていくためには上部で考えていることが明瞭に早く下部に伝達されなければならないし、下部は意見をのべる機会をもちながらしかも能率よく与えられた仕事を遂行する必要があるのである。民主主義の時代とはいえ、縦と横との関係ははっきり各自が了解しておかなければならない事だと思う。もちろん上部は下部の能力と可能性を十分知って立案すべきであるが、このへんコミュニケーションが足りないような気がするのである。

ときに、青少年に関する行事など市側が提案し、地域に滲透させるため各区役所の関係者に参集願ったことがあったが、どうも一ぺんで、すっとパイプが通っていかないようにみうけられた。それ

は、区は直接地域に接しているために、たとえば市民課長などはあのこともこのことも負いきれないほどのものを背負っているのです、新しい青少年対策にはなかなか応じきれないということである。もっともなこととは思いますが、もしこういうことがいつもならば、新しい施策などはほとんど不可能になってしまいはしないかと思われる。

もっともすぐれた指導者は、その部下が自然に自分の思うような方向に動いてくれるように指導する人だといわれるが、無理なく、しかも上部の考えがスムーズに行なわれるよう工夫をして欲しいものである。しかもその見通しがついたことについてはじん速に実現させるのが行政の力であり、行政のゆえんであると思われる。しかし同時に直接市民と接している区職員の立場も十分に上部に達せられるよう、また区担当職員は地域住民の、ことに青少年にかかわる問題をよく把握して中央に提言すべきであろうと思う。今日はそのいずれもが他の仕事にかまけて不十分であると思われるのではない。

前述したように、青少協の担当する助言と社会教育委員会がもつ役割とがなかなか交わらないうらみがある。両者が実は同じようなことを考えながら少しもプラスとなって現われない。むしろある場合にはマイナスとなって働きかねないことはまことに遺憾にたえないことである。これをなんとか、頭書にのべたような有力な中央指導者が出て、あるいはみんなでかつぎ出して、青少年問題はこれで行なうという総力的計画が実行されるならば、市長が提案している「子供を大切に市政」も、社会教育が提唱している「社会を明るくする運動」も、青少協が具申した勤労青少年に対する各種施策も、全力を結集して邁進できれば、必ず実現をみることができると信ずるしだいである。

<青少年問題協議会専門委員・社会教育委員>